

氏名	佐藤 美央		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 9319 号		
学位授与年月	令和元年10月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	入院中の統合失調症者の心の理論とワーキングメモリへの介入 プログラムの開発		
主査	筑波大学教授	博士（医学）	日高 紀久江
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	浅野 美礼
副査	筑波大学准教授	博士（ヒューマン・ケア科学）	川野 亜津子
副査	筑波大学教授	博士（医学）	太刀川 弘和

論文の内容の要旨

佐藤美央氏の博士学位論文は、精神科救急・急性期病棟に入院中の統合失調症者への心の理論とワーキングメモリを高めることを目的とする看護師による介入プログラムを開発し、その有用性について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

統合失調症者は疾患の影響から対人機能障害が生じやすい。統合失調症者は対人交流のなかでストレスを受けやすく、また対人ストレスは精神症状の再燃や再発の要因になる。統合失調症者の対人機能障害には心の理論が関連しており、心の理論は自分と他者では見えているものが異なることを理解する「視点取得」、他者の心の状態を表象する「メタ表象」、他者の発言の意味を理解する「意図の推論」の3つの要素で構成されている。また、対人交流には、心の理論の基盤となるワーキングメモリが重要であり、統合失調症者の精神症状の寛解が認められる早期からの看護介入が重要である。しかし、既存の認知機能訓練は実施回数が多く、複雑な内容であり、精神科救急・急性期病棟の入院患者への適応が困難であった。著者は、先行研究の成果を参照して、精神科救急・急性期病棟に入院中の統合失調症者を対象にした看護介入プログラム（以下、プログラムとする）を作成した。このプログラムを入院中の統合失調症者を対象に、看護師である著者自身でプログラムを実施して、プログラム前後における心の理論、ワーキングメモリ、社会機能、そして対人機能の評価を行った。また、統合失調症者には、プログラムの各セッションの終了時にはプログラムの満足度、達成度の評価を行っている。プログラムの全過程を終了した統合失調症者に、自身の行動や意識の変化についてインタビュー調査を実施し、これらの結果からプログラムの有用性について検討している。

【方法】著者は、統合失調症者が短期間で最大の効果を上げられるよう、集団ではなく個別にプログラムを行った。プログラムは1回30～40分、週1～2回の頻度で、計5回で構成している。セッション1ではプログラムの説明と導入を行い、セッション2～5の導入部分ではワーキングメモリへの介入としてトランプの神経衰弱を行った。さらに、セッション2では心の理論の「視点取得」、セッション3は「視点取得とメタ表象」、セッション4、5では「他者の意図の推論」に注目し、ワ

ークブックを用いた課題方略型の学習を行った。

著者は、入院中の統合失調症者 46 名を対象にプログラムを実施した。統合失調症者の背景について、性別、服薬量、陽性症状・陰性症状評価尺度 (PANSS) を調査している。心の理論の評価には一次誤信念課題、二次誤信念課題、ヒント課題、ワーキングメモリは Trail Making Test Part B (TMT-B)、逆唱を、社会機能は Social Behavior Schedule (SBS)、そして対人機能は精神障害者社会生活評価尺度 Life Assessment Scale for the Mentally Ill (LASMI-I)、成人用ソーシャルスキル自己評価尺度を用いて評価し、統合失調症者には、プログラムの達成度、満足度は Visual Analog Scale (VAS) を行い、プログラム内容や時間、自身の行動や意識の変化についてはインタビューによる構造化面接を実施している。プログラム前後の対象者背景と各評価項目は Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定を行い、各変数の相関関係について Spearman の順位相関係数を用いて分析している。

【結果】著者は、精神科救急・急性期病棟 2 病棟で、統合失調症者に 10 カ月にわたり 46 名に対してプログラムを実施したが、プログラム実施中に退院になった対象者を除外し、最終的な分析対象者は 36 名であった。対象者の平均年齢は 45.03 (SD = 9.01) 歳、性別は男女とも各 18 名、介入開始までの平均入院期間は 31.08 (SD = 22.56) 日、平均罹病期間は 18.39 (SD = 10.13) 年だった。心の理論に影響する解体症状のある統合失調症者は研究対象から除外した。PANSS の陽性症状得点が高かったが、プログラムの前後の服薬量の変更に有意な差は認められなかった。SBS、LASMI-I、成人用ソーシャルスキル自己評価尺度の下位尺度を含めたクロンバックの α 係数は .71 から .94 の範囲だった。プログラム前後を比較すると、一次誤信念課題はプログラム後には全項目とも全員が正答となり、ヒント課題 ($p < .01$)、TMT-B ($p < .01$)、逆唱 ($p = .02$)、そして心の理論、ワーキングメモリに関連する LASMI-I (下位 4 項目とも $p < .01$)、SBS ($p < .01$) に有意な差が認められた。しかし、二次誤信念課題、成人用ソーシャルスキル自己評価尺度には有意な差が求められなかった。一方、統合失調症者におけるセッション内容に関して、セッション 2 の満足度・達成度がともに最も高かった。プログラム全般の実施時間、間隔はよかったという回答が多く、内容ではゲーム感覚で行えて楽しかったという意見もあった。インタビュー調査では、「他者の状況を理解するようになった」、「自分自身を客観視し、行動を変化させるようになった」など、自身の変化について回答した統合失調症者もいたと著者は述べている。

【考察】著者は、心の理論とワーキングメモリを高めることを目的としたプログラムの結果のなかで、誤信念課題や TMT-B、逆唱が有意に改善したのは、心の理論の 3 要素に着目した課題方略法学習により、他者の信念や意図を認知する能力が向上したのではないかと示唆している。また、ワーキングメモリでは、統合失調症者がゲーム感覚で、繰り返しながら行えたことがプログラム参加のモチベーションにつながり、集中力や処理能力の改善が可能になったのではないかと論じている。さらに心の理論、ワーキングメモリを基盤とする能力といわれる社会機能、対人機能にも有意差が認められたことは、プログラムのなかで第三者の視点から他者の考えを推測するという経験を繰り返したことにより、他者あるいは自己を客観的にみるという認識ができ、行動に影響したのではないかと考察している。

審査の結果の要旨

(批評)

佐藤美央氏の学位論文は、入院中の統合失調症者の対人機能の向上を目的に、心の理論とワーキングメモリに着目して、新規に看護介入プログラムを開発するとともに、各種指標を用いて多角的にプログラムの有用性を明らかにした研究である。心の理論の全要素を短期間に個別に繰り返して介入することで、心の理論、ワーキングメモリが向上するだけでなく、統合失調症者が他者や自己を客観視することが可能になるという重要な知見を示している。

令和元年 8 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士 (看護科学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。